

梅雨期の大雨に対する農作物等への技術対策

令和6年 6月27日
飯塚普及指導センター

6月27日から28日にかけて、梅雨前線が九州北部に北上し、福岡県の広い範囲で大雨となることが予想されますので、下記の事項等について指導をよろしく申し上げます。

特に、ほ場・農業用施設等の見回りは、気象情報を十分に確認し、大雨等がおさまるまでは行わないで下さい。また、大雨等がおさまった後の見回りにおいても、増水した水路など危険な場所には近づかず、人命を最優先に事故の防止を徹底するようお願いします。

あわせて、「農業災害技術対策マニュアルと気象災害工夫事例集」（平成17年3月）を参考にして下さい。

記

【共通】

- (1) 浸冠水の恐れのある場合は、農業機械や器具は、格納庫等安全な場所に移動する。

【水稻】

- (1) 深水状態が続くと軟弱徒長の生育となり、スクミリンゴガイの被害も多くなるため、除草剤散布時を除き、浅水～間断かん水管理を基本とする。早植え水稻は、有効茎が確保され次第、中干しを実施する。葉いもち発生ほ場では強い中干しを避ける。
- (2) 除草剤散布後、大雨によりオーバーフローした場合は、雑草の発生状況を確認し、残存雑草がある場合は、早めに中期除草剤での対策を行う。
- (3) いもち病の発生しやすい条件となるため、置き苗は早急に除去し、発生が認められた場合は直ちに防除を行う。粒剤は予防効果が主であることから、発生初期までに防除を実施する。
- (4) 大雨により冠水した場合には、早急に排水を図り、冠水時間を短くする。十分な排水ができない状況でも、葉の先端が水面から出るよう最大限の努力をする。排水後は、できるだけ新しい酸素を含んだ用水との入れ替えを実施する。

【大豆】

- (1) 排水対策を行い、播種作業ができる条件を整える。特に、排水が悪い部分は人力で作溝するなどにより、周囲溝、弾丸暗渠などの機械による排水作業ができるよう努める。また、排水口の整備を行い速やかな排水を図る。
- (2) 降雨の合間をぬって、ほ場の土壌水分が適度になったら播種を行い、7月20日までの適期播種に努める。適期播種には、組作業による耕起・播種や一工程播種が有効である。さらに、播種後の降雨対策として畝立て播種を基本とする。
- (3) 播種後の冠水被害を回避するため、周囲耕や畝溝は必ず排水口まで整備し表面排水を徹底する。出芽苗立ちが不足した場合は、播き直しを行う。播き直しの判断の目安は健全株が全体の7割以下とする。

【施設園芸】

- (1) 施設周囲の作溝により施設内への雨水侵入を防ぐ。
- (2) オイルタンクの元栓は閉めて、本体が倒伏しないように十分固定しておく。
- (3) 防水壁や排水ポンプを整備している場合は、事前に土嚢等で補強し点検しておく。

- (4) ハウス内外にある流防の恐れがある資材等は片付けておく。
- (5) 養液栽培等、停電による影響が大きい施設では、事前に自家発電機を準備する。併せて、浸水による漏電、ショートを防ぐため、回路の防水を確認し、不要な電源は切っておく。
- (6) 断続的な降雨等、天候不順の影響で土壌消毒（太陽熱消毒）の準備が遅れないよう、今後の天候に応じてほ場の片づけや消毒準備を速やかに進めておく。状況によっては薬剤による土壌消毒を実施することも想定しておく。

【野菜】

- (1) 排水溝を整備し、すみやかな排水を促す。
- (2) 浸冠水を受けた場合には、速やかに排水を図り、葉に付着した泥が乾かないうちに水で洗い落とす。
- (3) 降雨の合間を見て薬剤散布を実施する。
- (4) 断続的な降雨が続いた場合は、肥料の流亡が多く、過湿による根傷み等で吸肥力も低下するので、計画的な化成肥料の追肥や生育状態に応じた液肥の施用や葉面散布を行う。
- (5) ほ場が乾き始めたら軽く中耕し、新根の発生を促す。また、土が流亡し根が露出している場合は土入れを行う。土砂が流入し株元が埋まっている場合は株元の土砂除去や、畦を中耕して通気性を高める。
- (6) 曇雨天後の急な晴天時は、強日射により茎葉のしおれや葉や果実の日やけ等を生じるので、適宜遮光等を行う。

【果樹】

- (1) 病害の発生に注意し、特にブドウではべと病、カキでは炭疽病、ミカンでは黒点病、ナシでは黒星病、キウイフルーツでは果実軟腐病、イチジクでは疫病、黒葉枯病の発生が多くなるので防除を徹底する。長雨時には適期防除ができにくいのが、降雨の合間に薬剤散布を行う。なお、傾斜地におけるスピードスプレーヤ防除の際には、作業道の状況を確認した上で事故のないよう万全を期して行う。
また、降雨が続くと枝葉が軟弱に生育し葉害が生じやすくなるので、次の事に注意する。
 - (a) 薬剤の濃度は規定範囲内の薄い方で行う。
 - (b) 日中高温時の散布はできるだけ避け、朝夕の気温が低いうちに実施する。
 - (c) 散布量は過剰にならないようにする。
 - (d) 混用散布は避け、できるだけ単用散布とする。
 - (e) 病害の多発により早期落葉した園では、落葉の処分を徹底する。
- (2) ブドウやナシでは、急激な水分吸収により裂果を生じる恐れがあるため、園内への雨水の流入を防止する。
- (3) 園内が長時間湛水すると根傷みによる樹勢低下を招きやすいため、明きよを設置し、過剰な土壌表面水を速やかに園外に排出する。
- (4) 崩壊した園地農道等は、天候回復後速やかに復旧作業をすすめる。集排水溝が土砂等より埋没しているところは直ちに取り除き、園内外の排水を良くする。
- (5) 土が流亡し、根が露出している場合は速やかに覆土を行う。
- (6) 根傷みや早期落葉等が激しい園では樹勢衰弱が予想されるので、摘果等による結果制限を行う。
- (7) 施用した肥料の流亡、雨に伴う低温による肥効の遅れが予想される場合は、地力や生育状況に応じ追肥量を加減する。根傷みが激しい場合は、少量の追肥や葉面散布を実施する。
- (8) 長雨後の高温および急激な土壌乾燥は、ブドウやキウイフルーツの葉焼け、元葉の落葉、果房・果実の日焼け、縮果症等の生理障害発生の原因となるので、かん水、敷わら、草刈り等を励行する。

【花き】

- (1) 作物が風雨により倒伏した場合は、直ぐに立て直す。
- (2) 冠水・浸水がある場合は軽く中耕することにより、土中に酸素を送り、根に活力を与え、新根の発生を促す。また、土の流亡で根が露出している場合は直ちに土入れを行って保護する。
- (3) 病害を抑えるため、茎葉についた汚泥をよく洗い流す。また、雨が止んだら殺菌剤を散布する。定植後に、冠水や浸水で疫病等が発生した場合には殺菌剤を灌注する。
- (4) 排水の悪いほ場でマルチを行っている場合は、畝の肩までマルチを上げ、水分の蒸発を図り、土壌中の通気性を良くする。
- (5) 降雨量の多い場合は肥料の流亡が大きいので、速効性窒素や葉面散布剤を施用し、草勢の回復を図る。
- (6) 花木類の根が露出しているものは、すぐに土をかけるか、寒冷紗等で覆い、直射日光による乾燥を防ぐ。
- (7) 長雨後の高温および急激な土壌乾燥は、葉焼け等の生理障害発生の原因となるので、遮光、かん水、敷わら、草刈り等を励行する。
- (8) キクなど電照栽培を行っている場合は、停電の恐れがあるため、タイマー等の確認を行う。

【茶】

- (1) ほ場に浸水しないように努める。また、ほ場内に滞水しないように畝内の障害物を除去する。
- (2) 新植園や傾斜地の茶園では大雨で根の洗い出されたものは乾燥を防ぐため土寄せをする。
- (3) 大雨後の樹勢回復を図るため、速効性肥料を分施する。また、最終摘採が終了したほ場では尿素有効の葉面散布も有効である。
- (4) 炭疽病、輪斑病、もち病などの病害が多くなるので、防除に努める。
- (5) 樹勢に応じた整枝を行う。

【家畜】

- (1) 雨漏り対策など雨の畜舎内侵入を防止し、排水溝の整備を行う。浸水した場合は、汚れた敷料の除去、牛床の清掃、換気及び乾燥に努めて牛舎内を清潔に保つよう努める。
- (2) 搾乳機械や保温器具等、停電による影響が大きい施設では、事前に自家発電機を準備する。併せて、浸水による漏電、ショートを防ぐため、回路の防水を確認し、不要な電源は切っておく。
- (3) 浸水被害にあった牛や子牛は、こまめな観察を行い、異常牛は速やかに診察を受ける。
- (4) 水に浸かったロールや購入乾草などは、カビの恐れがあるため給与しない。

【飼料作物】

- (1) ほ場に水が停滞した場合は、排水口等の整備を実施し、速やかに排水を図る。
- (2) 降水量が多くなると肥料の流亡も多く、窒素肥料を主体とした追肥を生育状況に報じて実施することで、湿害の軽減や肥料切れ等による生育の遅れを回復させる効果が見込める。